

平成28年度「海の学びミュージアムサポート」事業完了報告書

事業内容：

平成27年度から新たに開始した「海の学び ミュージアムサポート」事業の2年目として実施した。

プログラム1「海の企画展サポート」として、全国15か所の博物館等が開催する15の海の学びに関わる企画展を支援し、各地の文化財・調査研究資料等の展示や付帯事業を通して「海洋」に関する国民の理解増進を図った。その他、プログラム2「海の博物館活動サポート」として12の博物館等が行う12の参加型プログラムを支援するとともに、プログラム3「海の学び調査・研究サポート」として4つの博物館等が行う4つの調査研究事業を支援し、海の学びを生み出す博物館活動の実施に向けたサポートを行った。

また、本事業の趣旨や目的、募集情報やサポート事例を広く博物館や一般に広報することを目的にWEBページの公開・運用を行った。あわせて平成29年度サポート事業の公募を行うことにより、本事業への申請や相談を広く受け付け、全国の博物館等に対して本事業の存在やねらいのPRを行った。

さらに、博物館の運営や博物館活動に専門的な知識を有する方や海洋教育に関する有識者、広報や地域連携等に関する有識者を委員に選定し、既存の「海の学びミュージアムサポート」事業のこれまでの実施内容に対する評価や今後の事業発展に向けた助言を頂く事を目的に有識者懇談会を実施した。

なお、第三者評価導入の観点から、プログラム1・プログラム2において各博物館等が開催した事業への来場者・参加者を対象に、各サポート対象事業における「海の学び」の成果を把握することを目的とした『来場者・参加者の「海の学び」調査(アンケート)』を実施すると共に、各サポート館が本サポート事業の実施を通じてどの程度「海の学び」の必要性や理解を得られたのかの情報収集を目的とした「実施者アンケート」を実施した。

1. プログラム1「海の企画展サポート」への支援(申請：28団体29事業、支援実施：15団体15事業)

①名 称：千葉県立中央博物館平成28年度企画展「驚異の深海生物 ―新たなる”深”世界へ―」

主催者：千葉県立中央博物館

開催時期：平成28年7月9日～9月19日

場 所：千葉県立中央博物館

内 容：本企画展は、深海生物学の最新の情報を紹介し、実物標本、模型、画像パネル、映像等を用いて、多様な深海生物とその生態について紹介することを目的とした。一般的には「グロテスク」、「奇妙」などという言葉で語られることの多い深海生物であるが、彼らが深海という過酷な環境にどのように適応しているのかを知ることにより、生物の本当の意味での多様性に対する理解を深めると同時に、すばらしい未知の世界がこの地球上にはまだまだあるのだということを伝えることを意図して実施した。

- ②名 称 :平成28年度企画展「つながる 川と海と人～あそぶ・親しむ・守る～」
 主 催 者 :千葉県立関宿城博物館
 開催時期 :平成28年10月4日～11月27日
 場 所 :千葉県立関宿城博物館
 内 容 :海や川は、古くから人々にとって脅威と恩恵の対象であった。江戸時代後期から庶民の間にも「遊ぶ」意識が芽生え、魚釣りや潮干狩りなどで楽しむようになった。海に「遊ぶ」意識は、時代とともに「親しむ」意識へ、さらに「守る」意識へと広がっていったことを紹介し、「親水」をとおして海が私たちにとっていかに大切であるかを伝える展示とした。
- ③名 称 :「たからのうみ と うみのたから」
 主 催 者 :公益財団法人日本科学技術振興財団(科学技術館)
 開催時期 :平成29年3月18日～4月9日
 場 所 :科学技術館
 内 容 :「海と地球」、「海の恵み」、「海を調べる技術」をテーマとする展示構成で、先端の科学・技術が活躍する大きな舞台である「海」への興味と関心を高めるとともに、「海」の恩恵とそれを利用するための次世代技術、そして「海」にかかわる産業・科学技術の将来なども紹介し、あらためて「海」の大切さについて考える機会とした。
- ④名 称 :企画展「図鑑で楽しむ江戸前の海」
 主 催 者 :東京海洋大学附属図書館
 開催時期 :第一期:平成28年7月15日～11月6日
 第二期:平成29年2月8日～3月10日
 場 所 :東京海洋大学附属図書館
 内 容 :「今、東京湾にいる魚」と「東京湾からいなくなった魚」、かつての「豊かな江戸前の海」「江戸前の海の移り変わり」と研究成果、楽しみ方などを、海洋専門の大学の図書館として、魚類図鑑を切り口とした企画展を第一期・第二期に分けて行った。第一期では江戸前の海の恵みの持続的享受のためには皆が東京湾について学び、考え、楽しむことが必要であるという観点から、来場者にとって「東京湾の学び」のきっかけとなることを目標とした。第二期では第一期展示中に新たに発見された精密な魚類画を展示・公開することで、話題性、新規性など新たな側面から東京湾の魚類生息環境とそれを維持する課題について楽しみながら気づき、学び合い、話し合っていたく機会となるよう実施した。
- ⑤名 称 :企画展「柳原良平 海と船と港のギャラリー」
 主 催 者 :公益財団法人帆船日本丸記念財団(横浜みなと博物館)
 開催時期 :平成28年8月20日～11月6日
 場 所 :横浜みなと博物館特別展示室
 内 容 :画家、イラストレーターとして著名な柳原良平は、一般には馴染みの薄い存在

になっている船を親しみやすいタッチで描き、多くの人々に船や海への関心を呼び起こすきっかけをつくってきた。柳原の「皆さんと一緒にこれからも海と船と港への思いを拡げていきたい」という思いを、柳原の作品展示を通して再現し、海と船と港に親しむ機会として企画展を実施した。さらに企画展のテーマへの理解を深めるために、多様な年代を対象にした座談会や絵本作りワークショップ、ガイドツアーなどの各種付帯事業を実施し、海と船と港に関するわかりやすく楽しい海の学びの場を提供した。

- ⑥名 称 : 企画展「駿河湾おさかな博覧会」
主 催 者 : 東海大学海洋科学博物館
開催時期 : 平成28年4月29日 ~ 10月10日
場 所 : 東海大学海洋科学博物館
内 容 : 駿河湾の特異な地形とその魚類相の多様性を分かりやすく紹介した。海の豊かな資源に対する研究や利用方法への理解を深め、駿河湾で発見された新種や日本初記録種を提示することで身近な海に研究素材が存在すること、またその研究成果を広く周知し、研究分野への興味を発起させることを目的として実施した。関連事業においては実際の生物を観察し、触れ、工作や体験を通して、海の環境と海洋に生息する生物を守り、未来まで引き継いでいくことの重要性を学ぶために実施した。
- ⑦名 称 : 魚々アーツ
主 催 者 : 特定非営利活動法人 アートNPOヒミング(ひみ漁業交流館 魚々座)
開催時期 : 平成28年4月9日 ~ 10月30日
場 所 : ひみ漁業交流館 魚々座
内 容 : 常設展示として館内に張り巡らされた氷見発祥の越中式定置網と、漁具・民具約4000点を活かしながら、見るだけではなく、話を聞く、味わう、調べる、実際に使ってみるといった体験を盛り込み、「和船ReBirth〜めぐる まわる 海と山〜展」、「タコカプセル展」、「纏うさかな展」、「いろんな魚知ってるもん〜知るからはじまる魚食展〜」の4つのテーマから年間を通した企画展を実施した。地域に根ざした海洋文化への学びをより深める機会の創出を目的に、木造和船や伝統的漁法、魚食文化、アートなどの多様な切り口から、海の学びの視点で様々なプロジェクトを展開した。一般参加者もプロジェクトに参加できる形式で付帯事業を行い、プロジェクトの過程や付帯事業の様子を展示に組み込むことで、「海」に対して体験型の学びの場を作り出した。
- ⑧名 称 : 伊勢志摩サミット開催記念特別展「浮世絵から見る海女」
主 催 者 : 海の博物館
開催時期 : 平成28年3月19日 ~ 7月10日
場 所 : 海の博物館
内 容 : 海女を描いた浮世絵を多数紹介し、描写された海女の習俗を通じて優れた漁獲技術や地域に息づく信仰、海産物と食、漁村共同体における女性の暮らしなど、海と人との幅広い結び付きを紹介する機会として実施した。浮世絵の描

写と対応した実物資料(アワビを獲る道具、海藻を刈る鎌、装束類、絵本他)を共に展示することにより、浮世絵から見てとれる海女の習俗、漁法や海辺の暮らし、伊勢志摩の海の豊かさ等に対して具体的なイメージを持ち、理解を深めることを狙った。また、付帯事業として海藻の刈り取りや貝紫染めを通じ海産物利用や海女の信仰、漁法について体験的に学ぶ場を設けると共に、講演会により展示内容の理解を深化させるなど、企画展全体を通じて地域の海への興味や理解をさらに深めることを目的に実施した。

⑨名 称 :平成28年度特別展「泳ぐカメ」-ウミガメのふるさと和歌山-

主 催 者 :和歌山県立自然博物館

開催時期 :平成28年7月16日～8月31日

場 所 :和歌山県立自然博物館

内 容 :和歌山県の近海に生息するウミガメ類を通じて、海が様々な生物にとって大切な生息環境であることを学ぶ機会とした。化石種から現生種までのカメ類に対する知見を得ることで、様々な時代の海の環境やその生態系を学び、現代における海的环境保全に対する意識を喚起した。また、カメ類の脚の進化による構造の変化を通じて、海での環境が生物進化に与える影響について学ぶ機会とした。あわせて展示以外の付帯事業の開催により、身近でありながら体験的に学ぶ機会の少ない郷土の海について、専門家の解説を交えながら理解を深める場を提供した。

⑩名 称 :特別展「江戸時代の兵庫津」

主 催 者 :兵庫県立考古博物館

開催時期 :平成28年10月8日～12月4日

場 所 :兵庫県立考古博物館

内 容 :古代には「大輪田泊」、中世から近世には「兵庫津」と呼ばれて、国際貿易港あるいは瀬戸内海の主要港として重要な役割を果たした兵庫津の歴史を学び、古代から現在に至るまで海や船舶による物流が私たちの生活を支えてきたことを再認識する機会として企画展を行った。また、関連事業としては専門的な講演や展示解説だけでなく、落語やクイズラリー、紙芝居など、親子で参加したり誰でも気軽に幅広い年代が参加しやすい関連事業を実施し、日常生活では気付かない視点から海や船についての知識を親子で共有したり、広く海洋への理解を深める機会とした。

⑪名 称 :「～深海の謎に挑む～スマスイ深海研究所」

主 催 者 :神戸市立須磨海浜水族園

開催時期 :平成28年7月14日～10月10日

場 所 :神戸市立須磨海浜水族園

内 容 :深海に生息する生きものやこれまでの海洋に関する調査研究成果などを紹介することにより、我々の生活に欠かすことのできない「海」の重要性を理解し、その「海」への愛着や親近感を持っていただくことを目的に実施した。来園者が深海の圧力や水温等を体験できる展示を取り入れることにより、ただ見るだ

けでなく、体験しながら「楽しかった」「面白かった」という記憶とともに深海について学ぶ機会とした。また、サイエンスカフェや講演会、ゲリラ解説などの関連事業を行い、実際に「深海」に関わる人々の生の声を聴く場や双方向にコミュニケーションを取ることで、さらなる深海への興味や理解を深める機会とした。

- ⑫ 名 称 : 企画展「船大工～三陸の海と磯船」
主 催 者 : 公益財団法人竹中大工道具館(竹中大工道具館)
開催時期 : 平成28年3月26日～ 5月22日
場 所 : 竹中大工道具館
内 容 : 和船は各地で異なる特徴や構造を持つ事を紹介する事によって、各地の海の環境や特徴・漁法の違いについて知る機会とした。企画展会場で実際に和船の製作実演を行い、道具・構造・神事などの視点から外国人船大工が解説することにより、日本人でも気付きにくい和船文化の優れた点や、人と海をつなぐ和船の役割、人と海の共存の歴史を再認識する機会とした。また、和船の製作工程に合わせてワークショップや神事などの様々な関連行事を行い、幅広い世代を対象に海と和船文化に親しめる機会とした。
- ⑬ 名 称 : 特別展示「モンコレ！～2016年夏の珍作コレクション～」展
主 催 者 : 笠岡市立カブトガニ博物館
開催時期 : 平成28年7月20日～9月30日
場 所 : 笠岡市立カブトガニ博物館
内 容 : 普段口にしてる「ちりめん」や「いりこ」がどのようにして漁獲、加工されているかや、その中には「チリメンモンスター」とよばれるちりめんやいりこ以外の生き物が本来は数多く混じっていることを紹介し、瀬戸内海の生態系の豊かさや人間を頂点とした海の世界を学ぶ機会とした。また、多様な形をしたチリモン探しを行う事によって、海洋生物への興味関心を高めると共に、瀬戸内海の豊かな水産資源を支える重要な役割を持つことを知る機会とした。ビーチクリーンをはじめとした各種関連事業を通じて、豊かな海を守る大切さを学び、次世代に豊かな海を引き継ごうとする心情を養う機会とした。
- ⑭ 名 称 : 特別展「深海の世界」
主 催 者 : 公益財団法人しまね海洋館(島根県立しまね海洋館)
開催時期 : 平成28年4月27日～ 9月19日
場 所 : 島根県立しまね海洋館
内 容 : 「深海」の環境・生態系・不思議を紹介し、そこから「海」全体への関心・理解を深める機会とした。「深い海とは」「深い海に生息する生き物たち」「深い海を調査する」「私たちと深い海の関わり」「深い海を体験する」の5つのテーマから、「深海」という未知なる「海」への興味・理解を深める機会とした。また、深海調査で採取されたゴミなどのサンプルを映像等で展示することにより、私たちの生活が深海にまでも影響を与えている事や、私たちの生活を見直すことで深

海の環境への影響を減らせることを紹介し、海洋環境の保全の重要性について考えてもらう機会とした。また、特に次世代を担う子ども達に海への親しみや理解を深めてもらうことを目的に、関連事業として深海生物を擬人化したキャラクターが案内役となり、海のもつ不思議や重要性をゲーム感覚で学べるワークシートを活用し、楽しみながら深海へ触れられる場とした。

⑮名 称 : 指宿まるごと博物館Ⅷ「もっと大好き！指宿展—海に開かれた私たちのまち—」

主 催 者 : 指宿市考古博物館 時遊館COCCOはしむれ

開催時期 : 平成28年12月17日～平成29年2月26日

場 所 : 指宿市考古博物館 時遊館COCCOはしむれ

内 容 : 薩摩半島の最南端に位置し、古来「海の玄関口」であった指宿の海にまつわる文物を、自然・歴史・考古学・民俗・産業といった様々な視点から紹介することにより、次世代も含めた幅広い年齢層に対して海と人との共生の歴史について知る機会とすることを目的に実施した。関連事業として、漁業士や専門科による講座や、海洋地形や海の信仰に関する神社等を巡るフィールドワーク、魚の体の仕組みを学びながら魚さばきと調理体験を行うワークショップ等を開催し、海とのふれあいや、海と人とのつながり、「海と人との共生」について学ぶ機会とした。

2. プログラム2「海の博物館活動サポート」への支援(申請:14団体14事業、支援実施:12団体12事業)

①名 称 : 萩・海のパラダイスツアー

主 催 者 : 萩・海のパラダイスツアー実行委員会(萩博物館)

実施時期 : 平成28年6月24日～10月21日

場 所 : JR山陰本線須佐駅～東萩駅、山口県漁協萩地方卸売市場、萩博物館、他

内 容 : 前年度事業の増強版として、市内に散在する海に関する見どころ(地質・生物・文化・食材)と列車・船など乗り物を組み合わせた子ども・親子向けツアーを、市内の小学校2年生全員による「学校行事プラン」と、市内外からの一般希望者による「自由参加プラン」として実施した。「学校行事プラン」では、地域の子どもが幼少期から同世代そろって萩の海の地質・生物・文化・食材などに触れ、魅力や課題に気づき考えていく機会を作ることで、郷土の海を守り育てる意識の創出する機会とした。「自由参加プラン」においては、市内外の親子が漁師やダイバーなど海に関わる様々な立場の人々と交流することで、海の現状や課題に関する生きた情報に触れ、海洋環境、生物多様性、海洋文化を未来に引き継ぐ重要性に気づく機会とした。

②名 称 : 「海洋教育」体感型アウトリーチ補助教材(トランクキット)開発

主 催 者 : 群馬県立自然史博物館

実施時期 : 平成28年7月1日～平成29年2月28日

場 所 : 群馬県立自然史博物館
内 容 : 海のない群馬県における海洋教育の一助とすることを目的に、学校教育機関と連携・協働しながら社会教育機関ならではの体験型アウトリーチ補助教材「トランクキット」を新規に開発し、プロトタイプとして制作した。地域の大学「群馬県立女子大学」と連携・協働し、若い世代が「海に関心がない」同世代・次世代に対して、どのように「海」を“やさしく”伝えるかをテーマに掲げ「体感型アウトリーチ型補助教材」を共同開発した。地域の盲学校と連携して、「誰もが」楽しみながら学べる「体験型」教材としての有効性と改良点について現場の意見を収集した。群馬県立自然史博物館内におけるワークショップを通して、来館者や参加者の反応を観察するとともに、課題についても洗い出しを行い、キットの改良を重ねプロトタイプを完成させた。

③名 称 : 兵庫の「海の学び」活動拠点の充実と次世代の若手育成プログラムの創出
主 催 者 : 兵庫県立人と自然の博物館
実施時期 : 平成28年5月28日～ 平成29年2月28日
場 所 : 兵庫県豊岡市竹野町を中心とした日本海側の海岸域、および姫路市沖家島諸島を含む瀬戸内海側の海岸域
内 容 : 兵庫県における「海の学び」をさらに展開させるため、実際に海に触れて、自然環境やそこに暮らす生物の大切さを実感することができる“サテライト拠点施設”の充実が不可欠である。日本海側では「竹野スノーケルセンター」を、瀬戸内海側では「いえしま自然体験センター」をそれぞれサテライト拠点施設とし、各施設の活動の充実を図った。それぞれの拠点施設の活動では、一般の方々を対象とした質の高い野外観察会や市民参加型調査等を開催して定着させ、それらに合わせて海洋教育に興味をもつ大学生らを対象にした「海の学び」のボランティア・リーダー育成研修を行い、実体験に基づく深い理解と興味を根付かせ、次世代の担い手の創出に取り組んだ。

④名 称 : 「海の学び」をひろめるまちづくり
主 催 者 : 真鶴町(真鶴町立遠藤貝類博物館)
実施時期 : 平成28年7月1日～ 平成29年3月31日
場 所 : 真鶴町立遠藤貝類博物館、真鶴魚市場、真鶴港、他
内 容 : ビーチコーミングやプランクトン観察、町内事業者との連携事業などを通し、人の暮らしやそれを支える漁業と海の自然の関わりを理解し、海の魅力や真鶴の海の豊かさを実感し、「海を学ぶ」場を提供するとともに、SNS等を利用して海の自然や魅力を発信することで、海の自然や魅力とそこからの学びを広く発信し、海に対するきっかけを提供し、観光客誘致につなげた。また、真鶴町内に海の学びを広める研修会を開催することで、事業の理解を得て、海の環境保全の意識の啓発を促し、持続可能な利用の普及を図った。

⑤名 称 : スナメリが棲む海に何が必要？『いきものが棲みやすい海を求めて』
主 催 者 : 貝塚市立自然遊学館

実施時期 : 平成28年6月1日～平成29年3月10日
場 所 : 貝塚市立自然遊学館、二色の浜、大阪府立青少年海洋センター、他
内 容 : 「海洋」をテーマに生きものや自然とふれあうことで、地域の自然環境について広く学べる場を提供した。地域の海「大阪湾」には、どのような生きものが、どのように生息しているのかを知るために、実際に海での生き物観察や地引網等の各種フィールドワークを実施した。学習する生きものの代表として、子どもたちにも親しみやすい「スナメリ」をテーマとして地域の海「大阪湾」の環境や生態ピラミッドを知る機会としました。事業の総括として、参加者を交えた報告会を開催することで、地域住民が、地域の海の情報をまとめ、地域住民に対して発表・情報共有することにより、海の現状を知り、今後について考え話し合う機会とした。

⑥名 称 : 輝津館&坊津学園「海洋教育」事業
主 催 者 : 南さつま市(南さつま市坊津歴史資料センター輝津館)
実施時期 : 平成28年7月5日～平成29年2月28日
場 所 : 南さつま市立坊津学園、坊津海岸、南さつま市坊津歴史資料センター輝津館
内 容 : 輝津館とコミュニティ・スクール(CS)坊津学園が連携し、博物館活動と学校教育がタイアップした土曜授業・CS授業を実施することにより、「海」を共通テーマとした博学連携による学びの場作りを行った。輝津館が専門とする人文系の授業としては、海上物流の歴史を物語る貿易陶磁や坊津の海岸景勝等をテーマに、海岸での体験活動や輝津館での学習により、海がつかない坊津と海外との交流の歴史、坊津の海岸が持つ景観価値やそれにまつわる文化、海岸地名等、「海の文化財」について学ぶことを目的として実施した。また、輝津館が専門としていない「食」や「自然科学」の分野についても、輝津館の持つネットワークにより地域の事業者や社会教育施設と連携し、幅広い分野から学校教育における海の学習をサポートする連携体制を取り、博学連携での質の高い授業を行った。

⑦名 称 : レンズから海を科学する～海で観察の基礎を学ぶ
主 催 者 : 岸和田市(きしわだ自然資料館)
実施時期 : 平成28年6月1日～平成29年4月9日
場 所 : きしわだ自然資料館、天王寺動物園、大阪府海洋センター、他
内 容 : 様々な海の生物やチリメンモンスターを顕微鏡や望遠鏡などの光学機器を使用して楽しみながら観察することで、参加した子どもや地域住民が、身近な海を自ら学ぶスキルを身につけ、自主的な海の学びにつなげる機会とした。また、小中学校理科のカリキュラム内の「虫めがねの使い方(小3)」や「顕微鏡の使い方(中1)」の学習時、基礎的な使い方を座学だけではなく実践的な観察を通じたプログラムとして提供とした。学校や生涯教育施設以外のレクリエーション施設や地域の祭りで本プログラムを実施することで、海は楽しいものであるということや、海に限らずどこでも実施できるということを知る機会とした。なお、小学生以下の児童や幼児は、保護者による関心の多少により海の学びの機会に差があると思われるので、学校園単位で実施する海に関わる行事に本

プログラムを提供し、学校に対する海の学びのサポートを行った。

- ⑧名 称 : 瀬戸内海から世界の海へ～次世代に受け継ぐ外国航路船員の知識・経験～
主 催 者 : 独立行政法人 国立高等専門学校機構 香川高等専門学校(粟島海洋記念館)
実施時期 : 平成28年9月9日～平成29年3月31日
場 所 : 三豊市粟島、粟島海洋記念館、香川高等専門学校詫間キャンパス
内 容 : 平成27年度プログラム3「海の学び調査・研究サポート」の成果として開発した、船員や海運に関する貴重な資料や体験談をまとめたアプリケーションを活用し、船員や海運を題材とした講義・ワークショップ・写真展を開催し、香川県や瀬戸内に住む人を中心に海に興味を持つ人の数を増やすことを目的として実施した。そこで本事業では、①海事技術者として就職を目指す海事教育機関学生向け、②一般学生向け、③一般の方向け、④海に関する保全活動に興味のある方向け、それぞれにあわせて海に関してより深く知り、考える機会を与える講座やワークショップ、写真展を実施することにより、海に親しむ機会の創出や、海の保全の重要性を知る機会とした。
- ⑨名 称 : 高校生・大学生向けレクチャー&カフェ「海の学び舎」
主 催 者 : 葛西臨海水族園
実施時期 : 平成28年4月1日～平成29年3月31日
場 所 : 東京都葛西臨海水族園
内 容 : 将来の進路を考え始める高校生や大学生を対象に、海をフィールドに第一線で活躍する専門家とふれ合いながら、4つのテーマを通じて海洋生物の面白さや、自ら探究・研究することの意義や楽しさを感じてもらい、海への興味喚起と将来の進路を考える機会とした。プログラムは第一部、第二部と大きく分け、第一部は講義を聴く座学だけではなく、水族園で用意できる本物の標本や生物を実際に観察する場とした。また、実際に海に行ってプランクトン採集の体験をするなど、実体験を伴うプログラムを行うことにより、興味喚起をはかり、水族館を活かしたより深い理解に導いた。第二部は「カフェタイム」として、講演内容に関係するものを食べ、それによりさらなる興味喚起をはかった。また、この時に「先生の履歴書」の時間を設け、研究者の自然体験や学生時代の研究内容など、難しく考えられがちな研究者の存在や海を身近に感じてもらう機会とした。
- ⑩名 称 : むつ湾シーサイドスクールプロジェクト
主 催 者 : 特定非営利活動法人あおもりみなとクラブ(青函連絡船メモリアルシップ八甲田丸)
実施時期 : 平成28年7月9日～平成29年3月31日
場 所 : 青森市ウォーターフロント地区、平内町、野辺地町、他
内 容 : 青森が誇る天然の良湾「むつ湾」を学び、近くて遠い存在となっている「海」と「人」の距離を近づけ、市民が海への愛着を取り戻し、市民ひとりひとりに豊かな海を次世代に引き継ぐ事を目的として、海上物流のシンボ

ルである青森市港湾文化交流施設青函連絡船メモリアルシップ「八甲田丸」を活動拠点としながら、豊富な水産資源を有する地域の海「むつ湾」にフォーカスした海の臨海学校「むつ湾シーサイドスクール」を実施した。小学生を対象とした「うみべん」では、地域の海における海洋環境とわたし達の暮らしの関わりについて、漁業体験など多岐にわたる体験型のイベントに参加しながら再認識するとともに、「海」への興味・関心を持つ機会とした。また、「うみゼミ」では高校生を対象としたスノーケリング講習やホタテ養殖漁業見学等の活動を行い、「次世代を育成する世代の育成」として位置づけ、うみべん参加者への指導を行う学生を育成した。また、参加者が学んだむつ湾の豊かさや特色・現状などを八甲田丸内展示スペースで展示紹介することにより、本事業参加者以外の市民に対しても地域の海を紹介する機会となった。あわせて、青函連絡船としての展示のみであった八甲田丸において、地域の海の情報発信する契機となり、今後の幅広い海の情報発信拠点整備に向けた足がかりとして実施した。

- ⑪ 名称 : クリオネと海洋酸性化
 主催者 : 蘭越町(蘭越町貝の館)
 実施時期 : 平成28年10月15日 ~ 平成29年5月31日
 場所 : 蘭越町貝の館
 内容 : 海の酸性化によって、クリオネ類にとって唯一のエサである巻貝が2100年には絶滅すると言われていたが、「海の酸性化」といった現象は馴染みがないため、平成27年度プログラム3により新種として発見されたクリオネを紹介するとともに、この新種のクリオネが海の酸性化現象によって絶滅の危機にあることを広く知ってもらう機会とした。これらを入力として、地球の約7割を占める海の温暖化や酸性化現象について理解を深め、変化しつつある現在の地球とみらいについて「いまできること」について考え、実行する機会として事業を実施した。
- ⑫ 名称 : 佐賀県の海の語り部講座-古代編-
 主催者 : 佐賀県立宇宙科学館
 実施時期 : 平成29年1月21日~3月20日
 場所 : 佐賀県立宇宙科学館
 内容 : 佐賀県の大地に刻まれた海の痕跡(化石)から、古代の海洋生物の多様性や数千万年に及ぶ海洋環境の移り変わりを学び、これからの海について考える講座として実施した。講師には各分野の専門家を招聘し、小学校3年生以上の受講者に対して、専門的な内容をわかりやすく解説した。また、質疑応答の時間を長く設け、実物化石などの標本に触れ、生体を一緒に観察することで、海洋生物への興味と関心を高めた。また、全5回の講座のうち3回以上受講した方には「海の語り部」認定証を配布し、希望者にはボランティアとして登録することで、海の学びを広める人材育成の場としても実施した。さらに、特設展示コーナーとして、各講座の内容を講座終了後も継続して展示することで、一般来館者にも海がもたらす生物への影響や佐賀県の古生物の多様性と現在の

海へのつながりを学ぶ場を設けた。

3. プログラム3「海の学び調査・研究サポート」への支援(申請6団体6事業、支援実施:4団体4事業)

- ①名 称 :青森県陸奥湾でのドルフィンウォッチングに関する基礎調査
主 催 者 :NPO法人シェルフオレスト川内(むつ市海と森ふれあい体験館)
実施時期 :平成28年4月1日～平成29年3月31日
内 容 :青森県陸奥湾に毎年5月～6月に回遊してくるカマイルカの群れの生態に関する基礎的な知見を得ることで、今後、野生のカマイルカの生態観察会(ドルフィンウォッチング)を安定的に開催していくことを目的に調査を行なった。海流と生物の分散や、海洋生態系とその保全の重要性を広く啓蒙する上で、人々に親しまれ、また食物連鎖の頂きにあるイルカ類を対象とした。多くの人々が興味を持ち愛するイルカを通して、海流と回遊、食物連鎖と海洋生態系、海洋環境保全の重要性について関心を持ち、学び、深く考えるきっかけを生み出すための調査研究を行った。地域の子もたちが、ふるさとの自然の奥深さを知り、誇りを持ち、地域の大人たちを巻き込んだ地域活性化に発展させていく礎となることを目指して実施した。
- ②名 称 :開国をテーマとする「海の学び」学習支援プログラムの開発に関する基礎的研究
主 催 者 :神奈川県立歴史博物館
実施時期 :平成28年8月15日～平成29年6月6日
内 容 :学校における「海の学び」については、主に理科分野が中心であることから、神奈川の歴史ならではの「開国」をテーマに、資料を活用した「海の学び」学習支援プログラムを開発することで、博学連携の強化を図ることを目的とした。博物館を知る教員と学芸員を研究分担者とする研究会を組織し、資料調査や他の博物館の事例研究を行い、2年計画のうち1年目の本年度は、主として小学校教員向けプログラムと児童向けプログラムについて検討した。これにより、これまで「海の学び」のみならず、博物館(資料)の活用に関心を向けてこなかった教員が、積極的に博物館ならびに資料を利用する機会を増進することにつなげることを目標とした調査研究を行った。
- ③名 称 :小学生向けシリーズ教育プログラムにおける子ども達の学びの評価に関する調査研究
主 催 者 :葛西臨海水族園
実施時期 :平成28年9月15日～平成29年3月31日
内 容 :本調査研究は、葛西臨海水族園での「海の学び」へつながる教育活動の発展を目的に、平成28年度に実施する小学5・6年生向けシリーズプログラム「集まれ! 汐っ子たち」全4回について「①教育プログラムに参加した子ども達にどのような学びが起こっているかの評価・研究」、「②事例研究」、「③ ①と②で得られたデータの分析」を行い、既存のプログラムを海の学びの視点で改

善するための評価を行った。学年ごとに対象を絞った教育プログラムの調査研究の成果は、既存の教育プログラムの改善や新たな教育プログラムの開発に生かすことができ、「海の学び」につながる教育活動全体の質の向上に役立つ。また、全国の水族館での評価実践例は博物館に比べ少なく、この実践例は水族館での評価手法の開発につながると考えられることから本調査研究を行った。

- ④名 称 : 暖流系浮遊性巻貝に関する分類学的研究及び海洋温暖化・酸性化が暖流系浮遊性貝類に与える影響の基礎に関する研究
- 主 催 者 : 蘭越町(蘭越町貝の館)
- 実施時期 : 平成28年2月1日～平成29年6月30日
- 内 容 : 本研究では、2016年に天草市から見つかった新種と考えられるクリオネ類の1種について、形態学的・生態学的・分子学的アプローチから、その特徴を調べ、新種であることを証明することを目的とした。さらに、クリオネ類の餌となる有殻翼足類は、海の酸性化によって、貝殻の溶解など、深刻な影響が示唆されている。本研究成果を入口として、海洋生物の背景にある環境問題について考える機会を提供し、海の役割や、海の温暖化・酸性化問題について広く知ってもらうことを最終目標とした調査研究を行った。

4. 「海の学びミュージアムサポート」事業専用ホームページの構築と運用

本事業の趣旨や目的、募集情報やサポート事例を広く博物館や一般に広報することを目的にWEBページの公開・運用を行った。平成28年度各館サポートプログラムの告知や報告書公開により、今後の社会教育における「海の学び」の活動を推進することを目的とした海洋教育実践事例のアーカイブ化を行った。あわせて平成29年度サポート事業の公募を行うことにより、本事業への申請や相談を広く受け付け、全国の博物館等に対して本事業の存在やねらいのPRを行った。

5. 「海の学びミュージアムサポート」事業有識者懇談会の開催

「海の学びミュージアムサポート」事業のこれまでの実施内容や実績に対する評価や今後の事業発展に向けた助言を頂く事を目的として、博物館の運営や博物館活動に専門的な知識を有する方や海洋教育に関する有識者、広報や地域連携等に関する有識者を委員に選定し、「海の学びミュージアムサポート」事業有識者懇談会を実施した。

1. 事業目標の達成状況:

【申請時の目標】

全国の博物館・水族館・図書館等社会教育施設で開催する「海の企画展」(海洋教育を意図した企画展・特別展)、「海の博物館活動」(海洋教育を意図した各種普及事業)及び「学芸員の調査・研究活動」(海洋教育が実践可能な学芸員の調査・研究)を支援し、社会教育施設からの海

洋教育の普及を図るとともに、平成27年度より展開している当事業の活動内容と成果について、有識者による評価と今後の展開をテーマとした懇談会を開催し、総合的な支援体制の構築を目標とする。

また、2016年度においては、事業検討懇談会などの機会を通じて、「海の学びミュージアムサポート」事業の改善やつくりこみと共に、本事業を短期、中期、長期と実施することを通じて、目指すべき各博物館、各博物館の所在地域、船の科学館などの目指すべき姿を描くことの着手も目標とする。

【目標の達成状況】

(1)プログラム1「海の企画展サポート」への支援

実施15企画展ごとに目標達成状況は異なるが、相対的に見て地域性や専門分野を活かした企画展を通して、各博物館ならではの「海の学び」を広く推進することができた。

「海の企画展サポート」入場者数各館合計：1,052,601人

①主催者：千葉県立中央博物館

入場者数：64,800人

成果：入場者数は目標の117%と上回る事が出来た他、400種を超える多種多様な深海生物の標本、模型を展示した。他館の展示ではほとんど見る事の出来ないような希少種も数多く展示することができ、深海生物の多様性を紹介するという観点からは大きな成功だったと言える。さらに、会期中、当館職員により論文発表された新種の展示を随時追加するなど、研究の最先端をリアルタイムで紹介できたことも、展示のオリジナリティと社会的な関心という観点の両面から成功を取めたといつてよい。パネルの解説文には、くだけた表現を使って親しみをもてるように心がけた。アンケートから見ても好評を得られた。改善点としては、解説パネルの漢字へのルビ付けが不足であるとの指摘が多かった。

②主催者：千葉県立関宿城博物館

入場者数：12,790人

成果：海や川は、古くから人々にとって脅威と恩恵の対象であった。江戸時代後期から庶民の間にも「遊ぶ」意識が芽生え、魚釣りや潮干狩りなどで楽しむようになった。海に「遊ぶ」意識は、時代とともに「親しむ」意識へ、さらに「守る」意識へと広がっていったことを紹介し、「親水」をとおして海が私たちにどれだけ大切であるかを伝えることが出来た点は評価できた。展示内容や展示手法に関しては高い評価を得た。改善点としては、歴史講座や解説会の充足率や参加人数が期待した数値には至らなかった。企画展入場者数も前年比では減少しており、企画展や館の魅力を伝え切れていないように感じた。

③主催者：公益財団法人日本科学技術振興財団(科学技術館)

入場者数:32, 244人

成 果:入場者数は目標の202%と大きく上回る事が出来た他、展示を通して「海」の恩恵とそれを利用するための次世代技術・産業等を紹介し、海の恵みを研究開発し、活用していくことの重要性を来場者に学んでいただいた。宝探しを演出として取り入れることにより、低年齢層にも展示を楽しんでいただけた。ワークショップはいずれも低年齢層まで楽しめるものであり、導入の役割を果たしていた。特に「小瓶の手紙はどこへ ～海流シミュレーション～」は難しい内容をブレイクダウンして解説し、ゲームでも盛り上がることができ、海の環境を解析するシミュレーション技術への興味増進に役立った。

改善点としては、実施項目の一つにあげていた「参加型の議論ワークショップ」は実現できなかった。理由のひとつは、科学技術館の来場者の主要年齢層が未就学児から小学生低学年と低いことにあり、実現するとすれば、事前募集の形にならざるを得ないが準備期間が短かったため対応ができなかった。

④主 催 者:東京海洋大学附属図書館

入場者数:10, 248人

成 果:明治時代の東京湾の漁場図、江戸時代の魚類を描いた和本とそれにまつわるエピソード、今の東京湾の楽しみについての展示などが好評だった。スタッフによる展示案内、手に取って見られる魚類図鑑の配置、クイズラリーのリーフレット設置なども展示内容をより深く知っていただくために有効だった。これらが東京湾について様々な気づきを喚起し、東京湾の「海の学び」のきっかけになることができた。

改善点としては、企画展の入場者数が目標を下回り達成率98%だった。広報を工夫するなど改善の必要があった。

⑤主 催 者:公益財団法人帆船日本丸記念財団(横浜みなと博物館)

入場者数:12, 145人

成 果:当館企画展では初めて女性入館者が半分を占めたことが成功点だったといえる。また、年代も20代5%、30代14%、40代14%、50代20%、60代24%、70代9%とほとんどの年代がまんべんなく入館していた。その結果、女性や20～40代という当館の企画展にあまり来ない層の人に、親しみやすい柳原の絵画やイラストレーション、絵本、映像などを通して、海と船と港に親しみと関心を持ってもらうことができたのは、今回の企画展の大きな意義であったと考えられる。

改善点としては、入場者数が目標の49%と大きく下回った。広報面では開催前、会期前半は多くのマスコミに取り上げられましたが、後半は市内、首都圏でのもうひと押しの広報ができず、中だるみになってしまった点は、とくに会期が長い場合の課題となった。

⑥主 催 者:東海大学海洋科学博物館

入場者数:99, 336人

成 果:駿河湾の海底地形模型を製作することで、壁掛け状態で展示することが可能になり、より分かりやすく地域の海について解説ができた。標本室に所蔵されてい

た新種、日本初記録の標本 6 点を長期間展示することができた。クマノミとイソギンチャクやダテハゼとテッポウエビの共生、ラブカに関する当館の研究を映像や研究論文・資料を用いて、駿河湾の魚についてアカデミックな内容を一般来館者に向けに分かりやすく展示することができた。

改善点としては、入場者数が目標の74%と下回ると共に、さらに動きのある展示(仕掛け物や大画面での映像展示)があれば展示がダイナミックになったと思われる。

⑦主催者:特定非営利活動法人 アートNPOヒミング(ひみ漁業交流館 魚々座)

入場者数:16,796人

成果:アートの切り口で海洋文化を捉え展示を行うことで、海に対する価値観を変える体験につなげることができた。また、付帯事業を通してさまざまな視点から「海」にまつわる文化に触れる機会をつくることで、海が包括する多様な価値や、海と里山とのつながりから生まれる豊かさなど、海と共に暮らすことの尊さを伝えることが出来た。特に子供たちには、実際に海に出て付帯事業を行うことで、海の体験への記憶を深めることができ、次の世代へつなげる機会になった。

改善点としては、付帯事業で様々な海洋文化の体験を行い、参加者はその体験と展示をリンクすることで、豊かな海の文化について学ぶことができると考えたが、館内の入場者の大部分は観光客も多く、付帯事業に参加せず企画展のみを見ることが多い。それを考慮し、企画展全体を設計する必要があったと考えられる。

⑧主催者:海の博物館

入場者数:7,583人

成果:美術館ではあまり行われぬ、浮世絵とそれに対応する実物資料を併せて展示することによって、海女漁の特性がイメージしやすくなり、展示内容の理解がより一層深まる、博物館らしい浮世絵展となった。触ることのできる模型や資料、解説文でのクイズの出題、ワークシートの作成など展示方法を工夫し、楽しみながら浮世絵の細部まで目をこらし見てもらうとともに、海女漁の技術の高さや、海洋資源保護と持続的な利用の必要性も、体験を通じて感じ取ってもらうことができた。

改善点としては、入場者が目標の89%と下回ると共に、伊勢志摩サミットにより外国人も含め多数の観覧者があることを想定し、同期間を中盤に入れて会期を設定したが、特に4月・5月は周辺施設同様に混雑等が警戒され来館者が大きく減少したことから、結果的にはサミット後により多くの会期を設定できればよかったと感じた。

⑨主催者:和歌山県立自然博物館

入場者数:34,082人

成果:和歌山県にとってなじみ深いウミガメを題材とすることによって、県外からの観光者にはもちろんのこと、特に県内の来館者に対して地域の海を見つめなおす機会を提供できた。また、来館者にとっては当たり前の「海」の存在についても、

「生体展示」の活用によりパネルや映像展示では伝えきれない「生命」の尊さとその命を育む「海洋」の働きとともに地域の「海をまもる」ことの重要性について意識してもらう展示ストーリーを構成できた。今後、当県のテーマである「水の国わかやま」について本特別展と相まって、より「地域の海」への関心を高める一助になると期待される。

改善点としては、入場者が目標の97%と下回ると共に、特に県外からの来館者を誘致することに課題が残った。今後における県外からの来館者誘致に対する新たな広報計画の必要性を感じた。

⑩主催者:兵庫県立考古博物館

入場者数:10,303人

成果:関連イベントのうち、クルージングのイベントは、これまでにない視点で実施したことから、たいへん盛況で、参加者にとっては海や海運、さらに港湾埋め立てなどへの関心が改めて高まったと考えられる。12年ぶりの江戸時代の「兵庫津」を取り上げた展覧会であったことで、興味関心が高かったと考えられ、神戸方面からの観覧者が、いつもより多く見受けられた。これにより、館の知名度が増したのではないかとと思われる。

改善点としては、入場者が目標の74%と下回ると共に、観覧者数が予想を下回ったことと、イベント参加者がクルージング以外は、少し低調であったことから、宣伝にもっと努める必要があったと考えられる。

⑪主催者:神戸市立須磨海浜水族園

入場者数:498,667人

成果:入場者数は目標の125%と上回る事が出来た他、深海という特殊な環境における調査研究とその成果に焦点をあてることで、深海研究、ひいては海洋研究の面白さや重要性についての理解を促し、興味を持っていただくことができた。難しくなりがちな深海についての話題を、水族園という場で楽しく学ぶことによって、深海、ひいては地球全体についての知識を得、広い視点から物事をとらえる力を身に付けていただくことができた。

⑫主催者:公益財団法人竹中大工道具館(竹中大工道具館)

入場者数:8,542人

成果:これまで海に感心がなかった人々に海の大切さやそこで生活することの意味を知ってもらうことが出来た。また逆に海に感心のある方に木の技術を深く知って頂けた。「知る」「作る」「遊ぶ」という体験の機会を増やしたことで、子供の来館者を増やすことができた。外国人船大工とのコミュニケーションを大切にされたため、日本人にとっては和の伝統を再認識する機会となり、外国人にはより深い理解を提供することが出来た。

改善点としては、入場者が目標の71%と下回ると共に、船を通して海を学ぶ視点はやや遠回しな感が否めず、アンケートを見ると伝わらなかった人も散見した。関連事業に参加せずに展示だけを見る人の視線を考慮し、もう少し海産などのテーマを入れてもよかったと考えられる。

⑬主催者:笠岡市立カブトガニ博物館

入場者数:22,149人

成果:さまざまな場所のチリメンモンスターを一挙に展示することにより、海の生物の多様性と海流など環境による生態系の相違など、海の複雑さや奥深さについて学んでもらうことができた。書画カメラや顕微鏡を設置したことにより、樹脂封入したチリメンモンスターの細部まで観察することができ、生命の神秘さについて知る機会を持てた。クイズや巡回展アイテムの設置、ハンドブックなどの配布により、来館者が気軽に展示に親しむことができた。

改善点としては、入場者が目標の88%と下回ると共に、瀬戸内海のモンスターだけでなく、日本海側、太平洋側(特に関東、東北など)さらに拡大した産地のモンスターを比較展示できれば、今以上に海洋生物の多様性や海の学びについてアピールすることができた。

⑭主催者:公益財団法人しまね海洋館(島根県立しまね海洋館)

入場者数:221,369人

成果:「深海」を5つのテーマごとに、その環境・生態系・不思議を紹介し、深海にはまだまだ未知なる世界が広がっていることを理解できる場となった。そして「海」の大きさ・広がり・可能性を学び、「海」全体への興味喚起がなされる場とできた。アンケートからも「海を身近に感じることで、環境を守らないといけないという意識が高まった」「たくさんの生物が生きていて生命をつないでいるのだなと思った」など環境や生命のつながりまで意識した意見があった。

改善点としては、入場者が目標の89%と下回ると共に、アンケートから「今までの企画展の中でも今回が一番充実していた」などの声も多クいただいたが、「もっと大人向けの解説があると良かった」とか「もう少し詳しく知りたかった」との声もあったので、より専門的な解説を大人向けに用意しても良かったと思われる。

⑮主催者:指宿市考古博物館 時遊館COCCOはしむれ

入場者数:1,547人

成果:第1章から第6章の展示を見学することで、「海に親しみ」、「海を知り」、「海を利用する」ことを学び、自発的・積極的に「海を守る」必要性を芽生えさせる機会とすることができた。展示内容と付帯事業とを連動させることで、指宿市における【海と人との共生】の歴史と、地域の海の未来へ向けた課題を深く理解することにつながった。展示や付帯事業を市民とともに作り上げることで、市民が海洋教育の担い手になり、見学者・参加者がより身近な目線で【海と人との共生】を学ぶ機会を創出できた。

改善点としては、今回企画展や付帯事業にあたり、市内の小・中学校に協力を依頼し、児童・生徒の参加があった。しかし、学校単位で連携した取り組みができなかったため、今後は「郷土教育」そして「海洋教育」の場として、学校教育の中で当企画展を活用してもらえるよう改善の必要がある。

(2)プログラム2「海の博物館活動サポート」への支援

実施12事業ごとに目標達成状況は異なるが、相対的に見て地域性や専門分野を活かした参加型の博物館活動の実施を通して、各博物館ならではの「海の学び」を広く推進することができた。

「海の博物館活動サポート」参加者数各館合計:160,608人

①主催者:萩・海のパラダイスツアー実行委員会(萩博物館)

参加者数:497人

成果:参加者数が目標の110%と上回る事が出来た他、本事業の「自由参加プラン」においては応募件数が定員の1.6倍に達し、この事業に需要があるだけでなく、昨年から継続したことにより夏休みを迎えた山口県内外の親子の間に期待され、恒例行事として少しずつ定着しつつあることがうかがえた。今年度から初めて導入した「学校行事プラン」は萩市内の小学2年生約300名全員を対象にするという類を見ない挑戦となったが、地域子ども達が同世代そろって地域の海を楽しむ学び、互いに海への思いや課題を分かち合う機会を初めて作る事ができた。このことは、地域の人々が幼少期から地元の海に関心をもち守り育てていく「地域力」へと発展させていく契機になったと考えられる。また、一般に小学校が独自に鉄道を使って海を巡るツアーや遠足を実施することは費用や調整などの面から難しいと思われるが、一部の参加校から将来的に自主的に同様の遠足を企画してみたいとの声があがるなど、新たな展開の可能性も見られた。改善点としては、「学校行事プラン」では多くの小学校を対象としたため、学校間のスケジュール調整が難航した上、学校それぞれの実情や要望を必ずしも十分には反映できなかった。

②主催者:群馬県立自然史博物館

参加者数:1,428人

成果:群馬県立女子大学と連携・協働したことで、海の環境の中でも、海無し県として、とくになじみの少ない「磯の生き物」について企画・立案・制作することで、参画した大学生自らが海洋について興味・関心を持つ機会にもなった。群馬県立自然史博物館内におけるワークショップを通して、来館者や参加者の反応を観察し、また、課題についても洗い出しを行い、キットの改良を重ねた。改良を重ねた「磯の生き物トランクキット」は、海のない群馬県下の学校へ貸出可能とし、「海」を体験する機会が著しく減少した生徒たちに「海」を体感できる機会を創出することが可能となった。改善点としては、参加者数が目標の47%と下回ると共に、事前のトライアルでは問題がなかったが、博物館内において運用したところ、触れ方を指導する解説者がいないと、破壊率が著しく高くなったため、予定していた館内におけるトランクキットの運用が、ワークショップを開催した2日間となってしまった。(当初予定は3回)

③主催者:兵庫県立人と自然の博物館

参加者数:1,217人

成 果:参加者数は目標の105%と上回ることが出来た他、兵庫県における「海の学び」をさらに展開させるための「活動拠点の充実」と「次世代を担う若手育成プログラムの創出」を行った今年度の事業では、サテライト拠点施設として「竹野スノーケルセンター」と「いえしま自然体験センター」の活動を充実させて、同時に大学生を中心としたボランティア・リーダー育成の仕組みをつくることが出来た。改善点としては、海の学び活動の拠点施設における長年の懸案事項である「若手ボランティアの育成」については、今年度の事業を通して、博物館と拠点施設で一つの連携の形を創出することができたが、いずれの拠点施設においても若手の育成の試みは始まったばかりである。来年度以降、若手育成プログラムの充実を図り、海洋教育に興味・関心を持つ人材を継続的に発掘していく仕組みづくりが求められる。

④主 催 者:真鶴町(真鶴町立遠藤貝類博物館)

参加者数:1,029人

成 果:参加者数は目標の124%と上回ることが出来た他、多くの人に地域の人の暮らしやそれを支える漁業と海の自然の関わりを理解し、海の魅力や真鶴の海の豊かさを実感し、「海を学ぶ」場を提供することができた。真鶴町内で各種海の学びを広める研修会を開催し、真鶴町役場職員への研修では漂着する海洋ゴミをはじめ、行政職員が関わるべき海の問題、環境、教育のみならず、漁業や観光などの産業に関わることなどの認識を新たにし、今後の業務の中で幅広い視点で海を捉えて考える機会となった。27年度から取り組んでいた海の事業者との連携においては、2件のモデル事業を実施するに至った。また、これらの結果を海に関わる事業者・団体が参画している「海を学び、海に親しむ場づくり協議会」メンバーを中心に報告し、活発な議論が行うことができた。改善点としては、モデル事業として行なった「真鶴 海の自然の恵みまるごと体験ツアー 海釣り&プランクトン観察」では、ボート事業者と連携し、真鶴沖での釣りと陸に帰ってからプランクトン観察、釣った魚を捌き、飲食店で焼いて食べるという企画でコンテンツとしては好評を得たが、収益をあげるには価格が手頃とは言えなくなる。そのためには、より多くの事業者や観光協会、宿泊業者と連携し、夏季などに宿泊とより多くのプログラムをセットにした企画で高収益を上げられるような形が望ましいのではないかという意見もあり、今後、検討する余地を残した。また、一方で、今回とは違う事業者とのモデル事業を実施し、様々な形を見出す必要も感じられた。

⑤主 催 者:貝塚市立自然遊学館

参加者数:380人

成 果:大阪湾の生きものとして親しまれている《スナメリ》をマスコット的なシンボルとすることで、特に子どもたちにも親しみやすい「海への入口」となる事業が構成できた。当館の今後における海洋教育の実践でも「海に親しむ」ことから始まり。そこから海について興味・関心をもってもらうストーリー性の大切さも実感できた。学術的要素一辺倒の学びの時間だけではなく、楽しみながら学べる当館ならではの学びの機会のあり方を再認識できた。

改善点としては、参加者数が目標の76%と下回ったと共に、今後は、より多くの方々に参加してもらうことを目的とした開催行事の周知の広報計画工夫の必要性や、参加者のスキルにもレベルがあり、初級的なテーマからより知的好奇心を満足させられる多様なプログラム開発の必要性も感じた。

⑥主催者:南さつま市(南さつま市坊津歴史資料センター輝津館)

参加者数:228人

成果:参加者数は目標の167%と上回る事が出来た他、新たに自然科学系の社会教育施設との連携体制を構築し、坊津学園における海の授業の分野・コマ数の拡充により、海洋生物、歴史・景勝、食文化など、様々なテーマが「海」に繋がっていることを参加者に知ってもらい、「海の学び」に広がり、多様性を持たせることができた。また、南さつま市教育委員会との連携により、市の教育施策を記載した「南さつま市の教育」の重点施策において、地域の海をテーマとして博物館を核とした海の学び・海洋教育の推進をする旨が平成29年度から明記されるよう協議を行い、予定通り平成29年度から明記されたことにより、今後の海をテーマとした博学連携推進体制の構築の第一歩となった。

改善点としては、「海の学び」を目的とした授業テーマを設定したが、アンケート結果の中では、「海の学び」という主催側の意図、主旨がしっかりと伝わっていませんでしたと思われるケースも若干みられました。

⑦主催者:岸和田市(きしわだ自然資料館)

参加者数:18,832人

成果:参加者数は目標の1,651%と大きく上回る事が出来た他、臨海学校への出前授業は、昨年に続いて小学校のニーズと合致し、岸和田市内のみならず市外小学校からも依頼されたため、昨年よりも多くの学校行事で実施した。また、今年度は顕微鏡やルーペを多数購入し、小中学校理科のカリキュラム内の「虫めがねの使い方(小3)」や、「顕微鏡の使い方(中1)」の学習時、基礎的な使い方を、座学だけではなく、実践的な観察を通して学習できるように位置づけてプログラム化したため、生き物を見つけることだけにとどまらず、光学機器の使い方や、それを使って観察することのおもしろさを周知することができ、学校との連携を大きく推進することができた。また、未就学児への対応として、市内幼稚園1園と連携してほぼ毎月、年間を通した未就学児童むけプログラムを行い、継続した海の学びを行うことができた。

改善点としては、未就学児童むけの事業についての周知を行ったが、内容が分かりにくいということで、他の事業にくらべて依頼が少なかった。今までに行ったことのない事業を行う際には、会議や印刷物、HPによる周知だけではなく、プレ行事などの開催が必要である。

⑧主催者:独立行政法人 国立高等専門学校機構 香川高等専門学校(粟島海洋記念館)

参加者数:12,019人

成果:参加者数は目標の1,202%と大きく上回る事が出来た他、前年のプログラム3「海の学び調査・研究」の成果として開発したアプリ「粟島船員資料館」を活用

して、船員や海運に関する貴重な資料や体験談を題材とした講義・ワークショップ・写真展を行い、香川県や瀬戸内に住む人を中心に海に興味を持つ人の数を増やすことに繋がった。海事教育機関学生には船員OBを講師としたインターネット中継授業を、一般学生向けには海ごみ拾い・食育・海運を様々なテーマに関する統合的なワークショップ、一般の方向けには写真展と船員によるワークショップ、既に海に関する保全活動に興味のある方には、海ごみ拾い・海運に関して学べるワークショップを開催することにより、海に対して様々な距離感を持つ人々に対する確に海の学びのきっかけとなるプログラムを提供することが出来た。

改善点としては、一般募集のワークショップ参加者をさらに増やすために、各方面への宣伝活動をより活発に行う必要があると思われる。

⑨主催者：葛西臨海水族園

参加者数：79人

成果：海をフィールドとした最前線の専門家からの体験談やワークショップにより、「人生の道すじを考えられた」、「生活と海のつながりが感じられた」といったアンケートの回答を得られたことや、プログラム後に演者の先生に職業についての相談を持ちかける学生の姿が見られるなど、プログラムの対象となった高校生、大学生に海洋に携わる職業の意義や楽しさを伝えるという、本事業の目的として設定した一定のキャリア教育としての役割を果たすことができたと考えられる。

改善点としては、参加者数が目標の65%と下回ったことから、応募が定員に達していない点は、募集期間の短さ、広報媒体の選定などに原因が求められる。

⑩主催者：特定非営利活動法人あおもりみなとクラブ（青函連絡船メモリアルシップ八甲田丸）

参加者数：6,228人

成果：参加者は目標の579%と大きく上回ることが出来た他、サポート事業として今年で2年目となり、事業の認知度がかなり上がり、昨年の実績と比較して参加応募者数がかなり増えた。また、『海の勉強会（うみべん）』が、青森の社会教育事例の一例としてマスコミ等に広くとりあげられ、地域の活動としての認識が高まった。これにより、今後は青森市ならではの社会教育のモデル事業として、行政が中心となり行っていくための礎が出来たと思われる。今回新たに「次世代を育成する世代の育成」を目的として行った「うみゼミ」については、今回高校生を対象としたことにより今まで以上に参加者の対象範囲を広げるとともに、うみゼミに参加した高校生が積極的にうみべんスタッフとして手伝ってくれたことで、世代間の交流や継続的な海の活動を行なっていける事を確認する共に、海をテーマにした地域での次世代育成サイクル構築の足掛かりとなった。

改善点としては、うみゼミ活動については体験ダイビングで終わってしまったが、さらにスキルアップしたいという参加者もみられたので、今後はさらに踏み込んだライセンス取得の援助が出来る様な事業を行う必要性が感じられた。パネル

展示については、海域環境や漁業についてなど、見学者がより興味を持って学べるような展示内容にする必要がある。

⑪主催者：蘭越町（蘭越町貝の館）

参加者数：1,608人

成果：平成27年度プログラム3「海の学び調査・研究サポート」の成果である「新種のクリオネと海洋酸性化の関係性」を基に、全国4か所の博物館施設での事前・事後学習展示や図書館でのブックトーク、講演、ダイビング観察などの体験的な活動を行った。「新種」「クリオネ」といったタイムリーかつ地域性を活かしたテーマから海への興味を掻き立てる学習プログラムを提供し、極域の海の世界連鎖や海洋酸性化という深刻な問題について知ってもらう機会を創出できた。また、テレビ・新聞・ラジオ等数多くのマスメディアに取り上げられたことから、参加者以外に対する波及効果は非常に大きかったと思われる。改善点としては、参加者数が目標の16%と大きく下回ったと共に、参加者の少なかったダイビングについては、直接体験できる貴重な機会ではあるが、危険が伴うことからスキルを持った人に限られてしまい、参加者数の減に繋がった点は今後の課題として整理する必要がある。

⑫主催者：佐賀県立宇宙科学館

参加者数：25,671人

成果：参加者数は目標の106%と上回る事が出来た他、幅広い年齢層の受講者に対して、佐賀県近海の海洋生物の進化や多様性など、多角的な海の学びへの興味と関心を高めることができた。また、通常のイベントでは少ない60代以上の来館者が大半を占めたことから、講師と受講者だけでなく、受講者同士の会話が弾み、地域交流の場となった。特に、小学生の受講者に対して、60代以上の複数の受講者が、海の重要性や生き物の面白さを熱心に伝えていた場面がいくつみられたことから、生涯学習の場として当館を活用頂く結果となった。改善点としては、小学生の受講者の中には、内容が難しいと感じ、十分な満足感が得られない参加者もみられた。そのため、講師以外のスタッフが内容を理解できていない受講生をフォローする体制を整える必要がある。

(3)プログラム3「海の学び調査・研究サポート」への支援

実施4事業ごとに成果は異なるが、各事業とも地域性や専門性を活かした調査研究の実施を通して、今後の「海の学び」に繋がる博物館活動の実施に向けた事前準備を整えることが出来た。

①主催者：NPO法人シェルフォレスト川内（むつ市海と森ふれあい体験館）

成果：調査期間中、ほぼ100%の確率でカマイルカの群れに遭遇することができた。また、湾内でイルカの群れを高い頻度で観察できる場所が、湾西側のむつ市脇野沢沖と湾口部下北半島寄りのエリアであることや、これらエリアは波も穏やかで、また船の発着点である脇野沢港からの移動距離・時間が比較的短いことが明

らかとなった。これらのことから安定的にイルカ観察会を毎シーズン開催することが可能であることがわかった。また、10数頭の群れを多数見る時や、一度に100頭を超える大きな群れでいることもあり、これらは、研究のみならず、教育等での観察会にも適していることを示した。国内外で上記のような規模で比較的容易に観察できる場所は稀と思われる。チャーター漁船による上記の調査の他に、むつ市所有の遊覧船(夢の平成号)を用いても調査を行なった。ここでは、遊覧船が一般向けの観察会に利用できるか、その具体的な可能性について検討した。結果、漁船同様にこの遊覧船でもイルカの群れを間近で観察することができた。しかも漁船と違い揺れも少なく子どもでも安心して乗れ、定員数から学校や団体などでの参加に対応ができる。同遊覧船は学校教育や生涯学習でのイルカ観察(ドルフィンウォッチング)に適していることが確かめられた。

②主催者:神奈川県立歴史博物館

成果:教員および他館で博学連携にかかわる学芸員とともに研究会を組織し、調査研究テーマについて多角的に議論することにより、多様な学習支援プログラム案をそろえることができた。また、当館所蔵資料に加え、他機関所蔵資料を調査研究することで、学習支援プログラムの幅を広げることができた。本調査研究にかかわる資料について、地元の研究者から意見を得る機会を持つ事が出来た他、小学校教員向け指導案作成過程において、現職・元職の小学校教員から意見を出してもらう機会を設けることができ、現場に即した指導案作成をすすめることができた。

③主催者:葛西臨海水族園

成果:葛西臨海水族園での「海の学び」へつながる教育活動をより良いものにすることを目的に、平成28年度に新たに開発した小学5・6年生向けシリーズ教育プログラム「生まれ!汐っ子たち」全4回について「①教育プログラムに参加した子ども達にどのような学びが起こっているかの、発達段階に則した評価・研究」、「②事例研究(教育の専門家と共に、子ども達の学びの様子解析や検証)」、「③:①と②で得られたデータの分析」を行った。これにより、学年により発達段階が違うことから、学年ごとに対象を絞った教育プログラムの調査研究の成果は、当館はもとより他の水族館における既存の教育プログラムの改善や新たな教育プログラムの開発に生かすことができ、「海の学び」につながる教育活動全体の質の向上に役立つ。また、全国の水族館での評価実践例は博物館に比べ少なく、この実践例は水族館での評価手法の開発にもつながると考えられる。

④主催者:蘭越町(蘭越町貝の館)

成果:浮遊性貝類のうち、有殻翼足類は海水中pH7.84で貝殻を形成できないと言われているが、将来避けられない海の酸性化による生態系バランスの予測を行うには、生物において最も基礎である分類学的研究を行わなければ、人類に認識されないまま海から消えることが懸念される。本研究において基礎的研究が行われ、有殻翼足類を捕食する裸殻翼足類の記載と、これまでの分類学的混乱を整理できたことは、分類学だけではなく、これらを基礎とした海の温暖化や酸性

化が及ぼす生物への影響を正確に知る上で重要な役割を担った。

(4) 事業検討懇談会の実施

博物館の運営や博物館活動に専門的な知識を有する方や海洋教育に関する有識者、広報や地域連携等に関する有識者による懇談会により、本事業1年目である平成27年度と平成28年度の途中経過の実施状況などを振り返り、事業全体の評価や今後に向けた意見を頂いた。各サポートプログラムのサポート手段や支援実績、サポート事例を含め、事業全体としては評価できるとの意見を頂いた。しかし一方では全体的にブランディングやPR戦略の不足、次世代育成のさらなる強化などの改善点も多く見つかった。今後のさらなる事業発展に向けては、「海の学芸員」の位置付けや活用戦略、プログラム4「海の学びセミナー」の実施方法などについて、よく練って実施する必要があるというコメントが出るなど、今後の事業改善に向けた有意義な意見を様々な視点から頂く事が出来、今後の事業改善に役立つと思われる。

(5) 「船の科学館の目指すべき姿」構築の着手

本事業は、「次世代に海を引き継ぐこと」を目的として設定し、その達成手段として各プログラムを用いて、博物館を中心とした全国の社会教育施設での「海の学び(海洋教育の一環)」の実践をサポートしている。しかし平成27年度まではこの事業を行っているのは船の科学館であるというPRや意識付けの戦略が乏しかったため、本年度からは本事業の推進を通じて、船の科学館が全国の社会教育施設における海の学びの推進役であり、ランドマークとして将来認識されるような目指す姿を掲げ、資料としての本事業及び本事業を行う船の科学館としての戦略の整理を行った。

2. 事業実施によって得られた成果:

(1) 博物館が行う多種多様な海の学びの実践事例の創出

プログラム1～3によるサポートを通じて、合計31件の「各地域、各分野ならではの、博物館が行う多種多様な海の学びの実践事例(サンプルケース)」を生み出すことができた。

(2) プログラム3の成果を基にした「海の学び」の実践

前年の平成27年度プログラム3「海の学び調査・研究サポート」の成果を基に、本年度博物館活動として実際にプログラム2「海の博物館活動サポート」として実践された事例が2件生まれた。(粟島海洋記念館、蘭越町貝の館)

(3) 本事業の新たな目標として、「自立を目指した事業」及び「博物館が核となって地域でムーブメントを起こす事業」の2つを設定し、その目標達成に向かって将来モデルケースとなり得る事業として、特に3件に注力したサポートを行った。(真鶴町立遠藤貝類博物館、南さつま市坊津歴史資料センター輝津館、青函連絡船メモリアルシップ八甲田丸)

(4) 博物館情報ネットワークの構築、運用

インターネットを活用し、「海の学びミュージアムサポート」専用WEBサイトにおいて、各サポートプログラム内容の告知や募集を行うと共に、決定したサポート事業の報告書等を広く公開し、今後の社会教育における海の学びの活動を推進することを目的とした海洋教育実践事例アーカイブの基盤を整備した。

■「海の学びミュージアムサポート」WEBサイト

①アクセス者数(ページビュー数):5,955人(30,558ページビュー)

※集計期間:2016年3月1日~2017年7月31日

②アクセス者の平均閲覧ページ数:3.35ページ

<内訳>

・新規閲覧者:64%

・リピーター閲覧者:36%

(5)『来場者・参加者の「海の学び」調査(アンケート)』の実施

各サポート対象事業における「海の学び」成果の把握や、今後において全国の博物館等が実施する「海洋教育の推進」活動をより効果的にサポートするための体制構築に向けた事業内容検討用の基礎資料を得ることを目的として、プログラム1・プログラム2において各博物館等が開催したサポート対象事業への来場者・参加者を対象とした、「来場者・参加者の「海の学び」調査(アンケート)」を実施した。

なお、昨年度の集計結果から低年齢層にとっては回答が難しい設問内容であったことが分かったため、低年齢層でも回答し易いように設問の見直しを行った。

第三者評価の視点から、客観的な「海の学び」の効果測定を行うことを目的に実施し、今後の各サポート対象事業における「海の学び」の成果と傾向を把握するための基礎資料として位置づけることが出来た。

【「海の学びミュージアムサポート」事業として】

・設問「海について学びましたか？」P1・P2合算の集計では、「とてもそう思う」と「そう思う」の合計が81%を占め、社会教育現場(博物館等)から「海洋」に関する生涯学習の場を広げる当事業の目的として一定の成果が認められた。

①プログラム1「海の企画展サポート」サンプル数:6,428(15事業)

②プログラム2「海の博物館活動サポート」サンプル数:2,990(12事業)

合計:9,418(27事業)

(6)実施者に対する「海の学び」調査(アンケート)の実施

平成28年度からは新たに「海の学び」に関する「実施者アンケート」を義務化し、各プログラムのサポート館が本サポート事業を通じてどの程度「海の学び」の必要性や理解が得られたのかの情報収集を目的として、各プログラムの実施者・実施館を対象としたアンケート調査を実施した。

【「海の学び」の理解度・必要性について】

・設問「海の学びを理解できたか」の集計では、「大いに理解できた」と「ある程度理解できた」の合計が100%となった。また、設問「海の学びの必要を感じられたか」の集計では、「大いに感じられた」と「ある程度感じられた」の合計が100%となり、海洋教育に特化した本事業のサポートを受けることにより、社会教育現場(博物館等)において海洋教育の理解や必要性を感じられたとの回答が得られた。

- ①プログラム1「海の企画展サポート」サンプル数:15(15事業)
 - ②プログラム2「海の博物館活動サポート」サンプル数:12(12事業)
 - ③プログラム3「海の学び調査・研究サポート」サンプル数:4(4事業)
- 合計:31(31事業)

3. 成功したこととその要因

【成功したこと】

- ①本事業の目標や戦略を整理することが出来、新たな目標設定(継続自立、ムーブメント化)や事業実施団体としての事業活用戦略の整理を行うことが出来た。
- ②新たな展開として「自立を目指した事業」及び「博物館が核となって地域でムーブメントを起こす事業」など、既存のプログラムを超えて「海の学びの意識啓発や人材育成」、「博物館を中核とした地域内連携構築」などのモデルケースとして、将来的に発展する可能性を秘めた事業3件を見出すことが出来た。(真鶴町立遠藤貝類博物館、南さつま市坊津歴史資料センター輝津館、青函連絡船メモリアルシップ八甲田丸)

【成功の要因】

- ①日本財団事業担当者との定期的な事業方針確認を行う事により、タイムリーに適切なアドバイスや改善点を共通認識として見出すことが出来たため。
- ②通常のサポートにおける日常的な支援館との情報交換や現地訪問を通じて、設定目標の達成に繋がり得る事例として注力したサポートを行う事が出来たため。

4. 失敗したこととその要因

【失敗したこと】

- ①各プログラムに対する問合せ件数及び申請件数が、昨年度から拡大しなかった。

【失敗の要因】

- ①2年目となり通常であれば申請件数や問合せ件数が増えるべきであるが、全体的に件数が減少した。要因としては、1年目の平成27年度と同様のPR方法と規模であったことに加え、積極的な現地訪問によるPRの不足が大きな要因として考えられる。